竣工25年を迎えた福岡・天神に立つアクロス福岡の2020年の姿。音楽ホールや国際会議場を備えた建物の南面には緑が生い茂り、地域のシンボルとなっている。基本設計は日本設計と建築家、Emilio Ambaszが行った

CLOSE-UP

ランドスケープデザイナー

田瀬理夫

現代の日本では、自然が“本来の姿”を失いつつあるのではないか。そこに向き合い、環境の再生に尽力するのが、ランドスケープデザイナーの田瀬理夫（みちお）さんだ。これまで街や都市の規模で数多くの造園と景観計画に携わってきた田瀬さんの取り組みから、住まいにおける庭づくりのヒントを探りたい。

Photographs : Nacása & Partners（＊のみ）　**Text** : Kyoko Furuyama

上／南側の天神中央公園や薬院新川沿いに咲き乱れる桜が美しい、春のアクロス福岡周辺。ビルの合間に佇むその姿は、都市の“山”そのものだ
下／竣工当時のアクロス福岡。苗木からこの場所で育成して“自然の山”をつくり上げることを目標としていたため、当時は建物の印象が強いと批判もあったが、数年後には高く評価されることに（写真／ⒸACROS Fukuoka）

アクロス福岡

福岡の旧県庁舎跡地利用の事業コンペにより、1995年に竣工した地下4階、地上14階建ての複合施設。南側に配された「ステップガーデン」と呼ばれる階段状の空中庭園の造園設計を田瀬理夫さんが担当した。田瀬さんは、源氏物語に登場する「春の山、夏の蔭、秋の林、冬の森」という庭園の描写になぞらえ、四季折々で姿が変わる山の景色をイメージ（下図）。当初は生長が早い常緑樹をメーンとし、その後徐々に間引き、さまざまな落葉樹を補植していくことで、季節によって多彩な表情を見せる“山”となった。保水力の高い厚さ50㎝の人工軽量土壌と自然の山にならった排水システムによって、各階の土に雨水を貯留し植物を育て、過剰な雨水は階下に流下。薬院新川に流入する。

福岡の中心地、天神にそびえる“大きな山”が、今話題を呼んでいる。この山は、1995年に竣工した複合施設、アクロス福岡（前・同頁）。階段状の屋上庭園をもつ壁面緑化の先駆けで、竣工から四半世紀を経て緑に覆い尽くされたその姿から「アクロス山」と呼ばれ、隣り合う天神中央公園と共に、都市のオアシスとして市民に親しまれている。この植栽の設計と監理にかかわるのが、ランドスケープデザイナーの田瀬理夫（みちお）さんだ。

地域の在来種で環境の再生を

田瀬さんは“環境の再生”を大切に、ランドスケープのデザインを行う。その思いの根幹を成すのは、東京で生まれ育った田瀬さんの記憶のなかにある、美しい都市の風景だ。魚の泳ぐ姿が見えるほど水の澄んだ堀、あふれんばかりの緑、路面電車が走る花崗岩敷きの道……。しかし「その風景は、1964年の東京オリンピックを境に急速に消えていった。それからの都市は“スクラップアンドビルド”が繰り返され、新しいものにしか価値が見いだされていないように感じる」と田瀬さん。人が暮らす環境をつくり出すランドスケープデザイナーを目指したのは自然なことだった。

環境を再生するために重要なのが、その地域の植生を蘇（よみがえ）らせること。「私たち日本人は、暮らしのなかで季節を感じる機会が少なくなっている。日本の在来の草木が減って、身のまわりの緑は外来植物の方がむしろ多いことがその原因の一つ」と田瀬さんは言う。プロジェクトの大小にかかわらず、田瀬さんが植えるの

さまざまなサイズの金網製プランターに、10〜25種類の在来植物を組み合わせた「里山ユニット」は、一台から購入可能。住宅の窓辺やベランダなどに置けるコンパクトなサイズもそろえる

5×緑

「里山を再現する」をコンセプトとして掲げ、都市緑化と環境保全に取り組んでいるシステム「5×緑（ゴバイミドリ）」。田瀬さんは、特殊な金網製のプランター「ウェーブメッシュパネル」に人工軽量土壌のアクアソイルを入れ、その地域の在来植物を植えた独自の緑化システムの開発に携わる。プランターの上面だけでなく側面にもツル性植物を植栽できるため、フェンスやパーティション、門扉など立体的な緑をデザインすることが可能に。特に、制約の多い都市部の街路などで多く取り入れられている。また、里山で森づくりをする人々と協力し、そこで育った在来種の実生（みしょう）苗や草花を供給してもらうことで、里山環境の保全にもつなげている（URL：https://www.5baimidori.com）

「5×緑」は土がない空間でも緑を増やせるうえ軽く、「ウェーブメッシュパネル」は配置の自由度が高いことが特徴。住宅の庭を始め、ビルの壁面や屋上、庇上にも緑を取り入れられる画期的な緑化システムだ

は地域の在来植物。異なる環境から運ばれた、生態系に影響を及ぼす帰化植物は避ける。在来植物はその地域の環境や風土で育ち、病気になりにくいのだ。また、多様な植物を植える「混植」も基本。一種類だけの場合、一本が傷むとほとんどの景色を失うことになるが、混植にすればその心配がない。「在来植物の多種混植」が、健康な生態系を生むと言う。

アクロス福岡においても、福岡の山々に自生する多種多様な在来植物が植えられている。それらは25年の時を経て、建物の南側一面を覆うまでに生長。竣工当時、約80種だった植物は、年々行っている補植に加え、鳥や虫たちも種子を運び、今では約２００種に。その姿は自然の山のよう。「年月と共に豊かさを増す、時間が味方になる建築」と田瀬さんが称するように、彼が目指す都市における緑の在り方がここに凝縮されている。

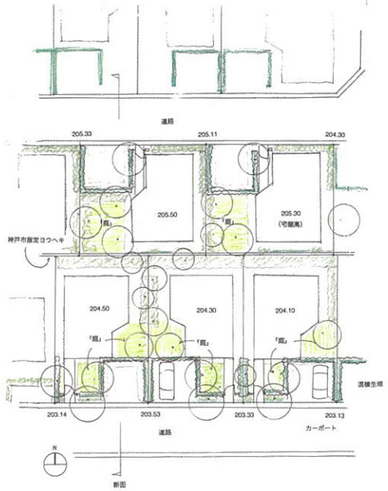
豊かな街並みをつくり出す緑

'77年に独立して以来、田瀬さんは集合住宅や住宅地の植栽計画に積極的に携わってきた。戸建ての庭だけではかなえられないような、豊かな環境が実現できるからだ。近年力を入れているのが、兵庫・神戸と茨城・つくばの「里山住宅博」（次頁上）、徳島・神山の「大埜地（おのじ）の集合住宅」。１００年、２００年と住み継がれる街を目指すプロジェクトで、田瀬さんは景観計画を担当。地域の在来植物によって、各住戸の外観や庭、外構にかんする緩やかな規定をつくることで、街並みの統一を図っている。

神山での取り組みの一つで、住人と共に行うのが「選択除草」だ。選択除草とは、外来植物を手作業で取り除き、根付いていくべき在来植物を残す手入れの方法。田瀬さんの指導のもと、共有する庭や川辺を季節ごとに住人が除草し、そこで得た経験をもとに、自分の庭や生け垣の手入れも行っている。自ら街を育てる意識により、時を経ることに緑は地域本来の生態系を取り戻し、育っていく。そして、やがて美しい一つの街並みに。

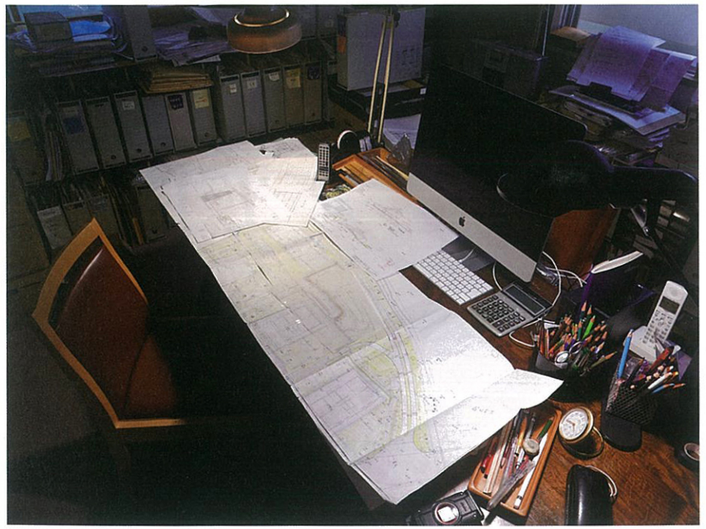
「これは、一軒一軒ができる小さな取り組み」と田瀬さん。窓を開ければ、その生態系に生きる野鳥のさえずりや虫の声が聞こえ、道を歩けば草木が四季折々の表情を見せる。自分の住まいだけでなく、街の規模で庭づくりを考えることができれば、私たちの暮らしは潤い、より豊かさを増していくのではないだろうか。

右・左／「里山住宅博 in KOBE」では、外構をコンクリートで固めない、隣家との境界は生け垣で緩やかに仕切る、庭を始め街区は在来植物だけで植栽を構成するなど、デザインのベースを設定することで、地域の多様な環境の保全が行われている。写真の建物は、建築家の堀部安嗣さんが設計したもの

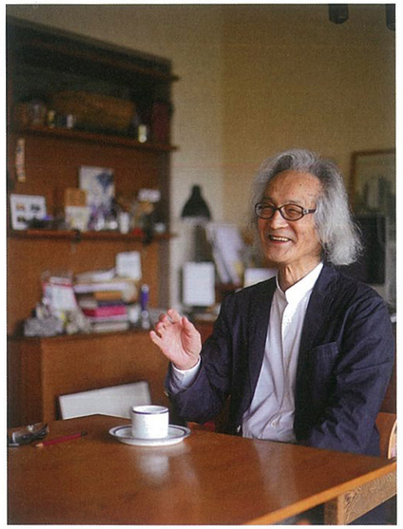


里山住宅博 in KOBE

田瀬さんが2014年からかかわる「里山住宅博」は、郊外の住まいを見直すことを目的に、地域の工務店が「百年生き続ける集落街区」づくりに取り組むプロジェクト。街区には建築協定と設計ルールが定められ、住まいのみならず、街並みの統一が図られている。田瀬さんはランドスケープの計画を担当。兵庫・神戸の里山住宅博では、住人がそれぞれ庭をもつほか、全員で「里山」を共有し、管理を行うというユニークな試みが行われている。里山には兵庫の在来植物と果樹としてウメやビワ、アマナツ、カキ、クリの苗が植えられ、住人全員で育て、収穫するという、楽しみを分け合う場所に。住人自ら街並みと里山を守り、次世代へと住み継がれる街づくりを目指す。



静岡・熱海に構える田瀬さんのアトリエ。これまで、集合住宅や大規模施設の緑化プロジェクト、造園や景観の設計に携わってきた。現在もプロジェクトの始まりは手描きのスケッチや植栽図だ＊



田瀬理夫　Michio Tase

1949年・東京都生まれ。千葉大学園芸学部造園学科卒業後、富士植木勤務を経て、'77年に自身のデザイン事務所（現プランタゴ）を設立。2008〜'18年・農業生産法人ノースの代表を兼務。現在、立命館大学客員教授。ランドスケープデザイナーとして、環境の再生と生物多様性の回復に取り組んでいる＊